

杉本苑子
新とはずがたり



新とはずがたり

杉本苑子

講談社

新とはずがたり

定価 一六〇〇円 (本体一五五三円)

著者 杉本苑子

一九九〇年三月二十六日 第一刷発行

一九九〇年六月二十九日 第二刷発行

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社



東京都文京区音羽二一十二二十一 郵便番号 一一二

電話 (〇三) 九四五一一一一 (大代表)

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

© SONOKO SUGIMOTO 1990 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-204807-8 (文二)

新とはすがたり◎目次

琵琶をひく少女	7
ムクリとワクワク	20
東二条院	40
春雪	53
鶴の毛ごろも	67
法皇崩御	87
治天の君	100
首をはねろ	115
八幡社頭	132
風の集団	149
生別死別	162

蒙古来たる	179
嵯峨野の一夜	187
粥杖	200
明石の上	217
断絃	234
百鬼跳梁	247
妙好華	260
弘安の役	271
鎌倉みやげ	282
八条院領	297
散りざくら	314

花に問え	332
霜月騒動	351
卒寿の姥	367
誤算	382
人喰い鬼	397
捨て聖	409
権謀術数	423
逆転	438
野萩の道	459
跡の白露	478
あとがき	489

装画／佐多芳郎

装幀／安彦勝博

新とはずがたり

琵琶をひく少女

西園寺実兼が、その少女をはじめて見たのは、後嵯峨院五十の御賀の、試楽の日であった。年は九ツか十ぐらいだろうか。伸ばしかけた髪を背の中ほどで切りそろえ、左手に、少女は琵琶をかかえていた。

実兼が注目したのは、じつは少女よりも琵琶だった。
(破竹ではないか?)

よくよく目をこらしたが、

(まちがいない破竹だ)

灯台の、ほの暗いゆらぎの中でも、実兼には確信できた。

それは、琵琶の名手と自他ともに許す実兼が、かねがね執心して、

「ぜひ、拝領しようございます」

と、持ちぬしの後深草上皇にねだりつづけていた伝世の名器である。「破竹」の銘は、太い竹を一気に断ち割りでもするような、するどい、切れのよい撥音を出すところからつけられていた。

「だめだよ。こいつはおれの秘蔵だもの、だれに乞われたって手放すものか」

そのくせ、あとひと押しすればくれそうな、曖昧な笑顔で、後深草上皇が焦らすように言うの

も、いつものことだ。

（おかしい。そんな破竹を、なぜ年齒^{としは}もゆかぬ小娘が試楽の座に持つて出たのか）

いったい、あの娘は何者かと、はじめて琵琶のかかえ手に実兼は関心を向けたが、髪で半ば、顔が覆^{おお}われているし、灯火をうしろにして坐つてもいたので、正体は見きわめにくかった。

だれにせよ、まだあどけない童女でいながら、大人たちに立ちまじつてむずかしい琵琶の演奏を引きうけるなど、腑^ふに落ちない。

試楽というのは、宴席での演奏に先立つておこなわれる管絃の試演のことで、この晩のように、宮廷の女性ばかりで演じられるのを、女樂^{おんながく}という。

五十歳の賀を祝われる当の後嵯峨院^{ごさか}が、

「どうせなら、女人の手でかなでられる優雅な調べを聞きたいな」

と望まれたことから、特に加えられた御遊^{きょゆう}なのである。

「だれが選ばれ、どの樂器を受け持つか」

とは、廷臣たちの口に早くから交わされていた話題で、実兼の場合、とりわけ琵琶に興味があった。

（でも、まさか破竹が使われ、それを子供が弾じるなどと、だれが予想したろう）

笙^{しょう}、ひちりき、笛や琴……。居ならぶ女性が、どれも相応な年のせい、少女はいっそう幼く見える。大きな琵琶に、小柄な全身が隠れてしまいそうだ。

（弾きこなせるかなあ、あの名器を……）

実兼が危ぶむうちに、合奏は始まった。

さすが、選^えびぬかれたその道の上手だけに、女樂の奏者たちは、いずれ劣らぬ技を披露^{ひら}した

が、実兼をおどろかしたのは琵琶の弾奏のみごとさであった。

それぞれの楽器が持ち味を生かして、華やかな音色を響かせた中でも、きわだって琵琶の撥音は力づよく、冴えて聞こえた。

（破竹のおかけか）

とも、実兼は疑ったが、名器というものは気むずかしく、下手が扱うと本来の音を出さない。それを自在に弾きこなしただばかりか、実兼さえ出せなかった玄妙な音を、少女はやすやす破竹から引き出してのけたのだ。

合奏がはじまると同時に、うつむいていた顔をあげて、きつと居すまいを正したから、

（おお、あの子ではないか）

少女がだれか、実兼にもようやく見当がついた。

それは、だいぶ前から後深草上皇のおそばに仕えて、お身の回りの小間用を弁じている召使の女童だったのである。

（名は……そうだ。上皇はたしか、二条と呼んでおられたな）

足がだるい、二条、揉んでくれ、文を書く、二条、墨をすれ——命じられるお声に従って立ち働く少女の姿を、御所に参るおりおり、実兼も見かけたおぼえがある。

もっとも、老若合わせれば、奉公人の数はおびたらしい。とりたてて二条一人を記憶にとどめていたわけではなかったから、破竹の弾奏を耳にしたときは、

（まさか、あの子が……）

不意打ちにひとしい驚きを味わわれた。

試楽が終り、後嵯峨院五十の御賀が済むのを待ちかねて、実兼は御所へ出かけ、

「感服するより呆れましたよ」

さっそく後深草上皇に問いたでした。

「いったい、どの何者が、あの女童にあれほどの琵琶の弾法を教え込んだのです？　子供のくせにあんなに巧みに弾かれては、わたくしなど形無しではございせんか」

してやったりと言いたげに、後深草上皇は肩をすくめてみせた。

「二条の琵琶の師は、このおれだよ」

「えッ、上皇さまが？」

「幼女のころは叔父の源^{みなもとのまさみつ}雅光に手ほどきを受けたらしい。でも去年からは破竹を与えて、おれがみっちり二条を仕込んだのさ」

「お待ちください」

あわてて実兼はさえぎった。

「いま、何とおっしゃいました？　破竹をあの子女に与えたとか……」

「ああ、やったよ。しつっこくねだるのね、少々惜しくはあったけど、やってしまった」

「それはひどい。あんまりです」

思わず実兼はつめ寄った。けろりと言つてのけた上皇の、にこにこ顔が憎い。

「わたくしが前々から、破竹の下賜を歎願していたのを、よもやお上もお忘れではござりますまい。口はばつたい申し条ながら、現今あの名器を拝領するにふさわしい家は、わが西園寺家を置いて他にはいはず……。それを、相手もあらうことか、召使の小娘ごときにあつさりくれておしまいあそばすとは、余りななされ方でございます」

後深草上皇を責めたてているうちに、ますます口惜しさが増幅されてきて、実兼は涙声にすら

なった。

衣冠束帯に威儀をただし、笏を構えてすましこんでいれば、けっこう貴公子で通るとのった目鼻立ちの持ちぬしたが、年でいえばまだ、十九の若者にすぎない。とり乱すと、年相応の未熟さが露呈してしまうのである。

時は鎌倉中期――。

国政の実際は、北条執権家を軸とする幕府が、親族や配下の御家人らを守護・地頭に任じて、「いささかの、疎漏もあらせじ」

とばかり、津々浦々にまで目くばり怠りなく取りしきっている。

公家たちは、手が出せない。する仕事もない。せいぜいが儀式と年中行事……。あとは宮中という鼻のつかえそうな「壺中の天地」で、おたがい同士、昇進競争にうきみをやつすほか、毎日のすごしようがないのだ。

そこでこのころから、彼らはそれぞれの「家の業」を言い立てはじめた。

どこそこの家は和歌、なにに家は筆蹟、どこは有職故実、ここは包丁と、各自、得意とする家業をきめ、一子相伝的な秘密主義をふりかざして、流儀の格づけ、家の権威づけをはかろうというのが、その狙いである。

西園寺家の場合、家の業は琵琶だった。

実兼が破竹に執着したのは、天下の名品を拝領して家の飾りとしたかったからだし、そのあてがはずれて躍起になったのも、一少女に、特権を侵害でもされたように感じたからであった。

「まあそう、むぎになるなよ実兼」

はぐらかすように言いながら、後深草上皇は肘枕でごろりと寝そべった。帝位についていたこ

ろから行儀はさほどよくなかった。御位を弟の亀山帝にゆずり、お気楽な仙洞ぐらしを始める
と、その傾向はいっそう顕著になり、実兼のような氣のおけない相手には、ことにもだらしなく
ふるまうて憚らない。

むりはなかった。上皇などといえば、すでに一線をしりぞいた「ご隠居」に思えるけれど、後
深草院は当時、二十五……。十九歳の実兼とは、おたがい血のつながる従兄弟同士だし、君臣
のへだてを越えた遊び仲間でもあったのだ。

だからこそ遠慮なく、伝来の琵琶をねだりもし、むくれ面を隠しもしなかった実兼だが、
「あの女の子はね、おれの妹なんだよ」

との、上皇の言葉には、さすがに呆氣にとられて、二の句がつけない表情になった。

「お妹さま!! ほんとうですか?」

「だれが嘘などつくものか。もっとも血縁ではない。おっばいだけで結びついた縁だがね」
「おっばい……」

実兼は目をまるくした。上皇の言葉づかいには、時おりびっくりさせられる。

もっとも遊女・白拍子ならまだしも、町を流して歩くぐつや舞々など、雑芸人までが宮中に
召されて、酒宴の酌取りをつとめたり、雑芸を演じてお目にかけたりする世相下ではある。

そんな手合のしゃべり交しを小耳にはさんで、得意氣に口にする癖が後深草上皇にはあつ
た。

「つまりいえば、乳兄妹さ。最初あの子に琵琶の手ほどきをしたのが、叔父の源雅光だと、さつ
きも言ったろ」

「聞きました。なるほど、権中納言雅光を叔父に持つ少女なら……」

「大納言久我雅忠の娘——。そこらの町家から奉公にあがった婢ではない。れっきとした上卿の息女だよ」

「では、雅忠の妻がお上に乳をさしあげた乳母、というわけですか？」

「うん。すけ大だ。二条はね実兼、すけ大の忘れ形見なのさ」

その乳母の名なら実兼も耳にしたおぼえがある。正式には、夫雅忠の官職を冠して、

「大納言ノ典侍局」

と呼ばれていた女性であった。

「舌がよく回らなかった幼いおれには、長たらしき言いづらい名なので、大納言の『大』と典侍の『すけ』をくつつけて、すけ大と愛称したわけだがね、おれが十七になった年だ。乳母は病氣にかかって亡くなってしまったんだよ」

「あの子はそのとき……」

「わずか二歳だった。だから可哀そうに、ほとんど母親の顔をおぼえていない。雅忠が男手ひとつで育てているのを見かねてね、宮中へ引き取った。四ツか五ツのころだったなあ。以来、二条はおれのそばでくらしている。女ひと通りの教養は、手塩にかけておれが仕込んだ。琵琶も、中途から雅光に代っておれが教えた。乳兄妹だし、学びの弟子でもあるわけだよ」

「破竹をねだられても、それでははねつけられませんか」

「そういうことさ。あきらめてくれ実兼」

「ところで、今さら不粹な穿鑿ですが、すけ大がお上の寵を受けていたという噂は、本当ですか？」

実兼がずばりと言つてのけたのは、破竹を貰いそこなった腹いせである。後深草上皇は、しか

し顔色一つ変えずにうなずいた。

「そうだよ。すけ大は乳母だけど、おれが男として関^かわったはじめての女でもあったんだ」
かくべつ珍しい例ではないし、特に目くじら立てて非難する事柄でもない。

成人し、女体に関心を持ちはじめた育ての君を、乳母が彼女自身の身体を用いて、男としての開眼をとげさせるのは、上流社会では昔からおこなわれてきた通過儀礼のごときものであった。性教育の実地体験といってもよい。

でも、赤児のときから抱き、抱かれ、あやし、あやされ、乳房を媒体として、声変りするまで密着しつつ生活してきた仲である。意識の上では、実の母と息子にひとしい。

そんな二人が、ある夜を境にいきなり腥^{なまぐさ}い男女関係に変わるのだから、やはりその結びつきは、あからさまにはしにくかった。

隠微な、どこかうしろめたい行為として、二人だけの暗がりでごっそり営^{いとな}まれるのが常なのに、後深草上皇の場合はちがっていた。

性格もあつたであろが、万事にあげつびろげで、人目を気にする風がなかった。

「すけ大が好きだ。好きなものを好きと言って、どこがわるい」

それはそうにしろ、二十以上も女の側が年上なのである。久我雅忠という夫までいたし、後深草上皇はそのころ十四か五の少年とはいえ、今上^{きんじょう}として帝位についている身だった。

「あけすけすぎるなあ」

「ちと、ご身分柄をわきまえてくださらねば困る」

廷臣どもの耳こすりにまして、苦りきつたのは父君の、後嵯峨院であつた。

「もはや乳母としての役目は終った。すけ大を即刻、久我邸へ帰せ」